

訪書續記

坤吉

明治四十年十二月中浣起筆
雙魚書主人

特別
44
1919
676



14
1919
576

176503

訪考續記

○十二月十二日 志本常幸、古字印刷 蘇金
石園と高ししをく示す

古今印刷

古今本一冊

其以 唐成 帰昌世の序あり 次々
遠彦の印あり 勅也 朱之 蕃并
張納陞の序あり

其之尾 華其易 歛起元 沈澄
何漢之 雲漢 照長 滔 丁元 世 薦
の跋あり

梁穀程遠彦所著手鑑
樵李項景原希憲校心

ニ其ハ唐ノ尾ニ校名の内ニ宣明也
飛秋の巻を列す

乾隆初年の版を炙しく古書可樹
自書也 價の安しと云ふ

東林堂製

向日高木弘の骨を末緒を述べ此家の表人
と右取居るは其の年集あるは其の物め
とましとやまし出し示ることをいふは流
しと出すは其のものを示るは書付乾かしは
世傳あるは古書なりと世に伝ふるは其の
皆よりえ保あるは其のものをいふは流
りし物なりと古書なりと示るは其の物め
ぬは余の持物なりと余の持物なりと示る
たんことを示るは其のものをいふは流
快く流るは其のものをいふは流
也今傳人：亦も其の持物なりと示るは其の物め

此の如くも貴家おしめし人々物するを此の如く
 喜也と余謝しそ其の致するまじくは
 多きを授けしと筆やうの致とす

佛に遠現紙料を出し十界雙六の
 條を安あすしん余う得たるこの口即ち
 冊條の若其の虫喰喰いの二念と此者
 二字も不と物念す即ち此の双六の京
 本よりこと疑を容んたす也

泉林堂

一 小合尺 堀 元禄四年 七三

一 聖堂之冷 福生土右之門草 七三

一 浄土雙六 享保五年 七三

一 十界雙六 前年 七三

一 五枚中銅板帖 二帖

此の如く田舎之印あり
 五枚中の銅板帖と云えり
 多きを備表紙とし一は死者の如
 一は在木を遺傳の條あり
 枚ありありの如く此の如く也

一 角力番付

是既、蜀山人谷風の錦繪二枚
の談あり、是属谷風の錦繪二枚
を収む

書付は安永三年、日七年

元のは、寛政十、文化元、文政五

外、上方の書付、二枚、寛政二

を収む

一 角力勝負付

安永四年、
元、二年、三、五、七

一 枚

一 千社巻題名集

凡そ二、三枚
共、巻を収む
札、付、あり

一 冊

東林書院

一 芝居冷帯付

四 枚

寛永四年の代と記しあり、一、枚
但し寛永の後に、珠く、あり

元禄十四年の出版年録あり、一、枚

鳥居清信の帯、一、枚

一 皆川原奉行

一 枚

一 大津侍佛像

掛幅
一 軸

一 尚古帖

多くの古版を収む、中、二、枚、難きもの

此代懐中巻、一、枚

元禄三年、曆

一 枚

龍白紙社古瓦
法隆寺古瓦

今川氏家系古瓦
龍王寺古瓦

二瓦中央より母系より肉圓

和名不明
の古瓦あり

岩佐又兵衛書下函古物切 二枚

寛文延寶尺の浮世繪美人 一枚

俵屋宗右書下草花圖 一枚

極彩名聖徳太子圖 一枚

根津湖紙行書付 正徳四九月敷三枚

由喜寺傳書下尺子此年ハ筆行
江戸才一の筆より七折

持谷天愚此平 一枚

泉標原表

金毘羅山會式歌人略傳圖 冊彩 一枚

大津信奴之圖 一枚

ハート形金地障子花し傳 二枚

一大徳下分ノ書物と受印一ノ扉函

：施しと多しし時書部の中巻者一枚

未迎寺為政真心傳部乱校本一枚

三州法華寺制札 永禄三年 一枚

西打重長之書下冊付 元禄九印多
寛永正徳ハ一枚

未分流の書

お探書付 寛政二年一枚

お探書付全書付 一枚

さうの所中村香堂在書付 方明書
紙の裏 一枚

芝居切手 神楽人前四十八文
と記しあり 一枚

扇裏の画像 一枚

千代巻札 三枚

支那刺繍 一枚

清不祝福刺繍古版 一枚

熊手湯札 数枚

以上 表：洋子(古)

清不刺繍 梵字 一枚

喜徳年刺繍内裏紙 一枚

元禄多分西御丸襖紙 一枚

東林堂

お撲書付 江戸のむめや殿
喜保の末のいあ
東大関丸山権太左衛門 一枚

丸山権太左衛門手形圖 取本 一枚

萬國世界地圖 元禄以後の
あり 一枚

文化六四年花鳥合童お撲書付一枚

口 満員付一枚

高嶺仕切書 刻本 二枚

元禄美人之圖 彩色あり
紙の裏あり 一枚

元禄以婦人服装お撲書付一枚

二摺端本 一枚

徳川の道々目上棟式ノ印教うしん夏珠
船の流葵章の反打也しん徳今地
相と厚金粒形あり

司馬以漢銅鑄五國幣し

元以上人自画

古版活ふも己を夏地

玄と書銅版以州不出寺

新川是古寺河上舟人、石、家令し

カ
三枚

評級し錦一

徳馬古文者 古印、古馬を
中く回す

東林原製

吉原細元古

江戸町人お書古来鏡り用物也

新吉原大坂屋敷上ヶ代引札

鞘画

寛保元年出版吉原細元

興の図 并：支那

其時各川札 代價付

油画

外二三枚

以上

書物三冊 添

題名四徳清況 一冊

千社長 著 題名四徳清況

在 海 小 話 林 一冊

相 撲 縁 起 一冊

大 正 九 年 校 一冊

〇 祝 賀 本 大 平 記 の 前 巻 の 記 し ま へ
此 以 前 刊 行 の 旨 に 於 け ば 出 版 者 院 又 其 の 傳 来
の 書 物 二 卷 と 冊 言 只 故 々 一 冊 以 上 掲 げ 掲 げ
け ん 是 掲 げ 記 事 一 冊 以 上 掲 げ 掲 げ 掲 げ 掲 げ
え 也

東京大学図書

家 除 草 創 大 平 記 表 目

夫 此 書 打 草 葉 之 元 本 也 嘗 為 特 隆
豐 臣 秀 吉 公 之 藏 書 矣

後 天 朝 事 業 家 代 藏 之 物 也
嘉 慶 院 藏 物 不 置 家 書 也 十 公 亮 西 大 廳

嘉 慶 院 藏 領 其 時 物 此 書 亦 為 其 有 乃

賜 是 於 本 下 宮 內 卿 利 房 傳 至 於 松 子

淺 湯 亦 利 當 子 寄 款 利 志 之 春 選 將

侍 席 時 將 利 當 孫 子 以 此 書 之 本 由 昌

乃 翁 者 大 手 記 身 門 之 宗 師 也

當 為 之 授 子 傳 成 聖 之 友 也 是 身 重 壯

書 之 至 也 十 冊 拜 觀 首 父 之 欲 使 孫 孫

於 歲 絕 代 之 孫 身 孫 孫 之 友 孫 孫 今 茲 孫 孫

本 是 朝 史 之 仁 也 而 天 祥 統 之 才 節

自 家 之 隆 殊 和 聖 也 如 何 不 崇 重 寶 珍

在 否 之 不 敢 放 過 且 地 親 孫 子 本 是 十

志 不 敢 忽 提 有 故 託 其 棟 梁 以 為 池

繼 而 已

昔 重 刊 繪 卷 本 八 藏 畫 春 聖

傳 之 前 列 四 冊 聖 主

白 得 子

一 本 威 氏 之 草 創 之 大 平 記 於 同 日 同 時 有 之

中 本 之 記 於 傳 中 事 實 則 本 本 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

一 本 威 氏 之 草 創 之 大 平 記 於 同 日 同 時 有 之

西 本 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

代 代 是 也 世 世 是 也 世 世 是 也 世 世 是 也 世 世 是 也

十 六 運 院 院 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

之 而 絕 全 下 如 列 是 也 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

三 如 國 家 院 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

者 細 尾 此 少 比 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

外 則 是 也 之 又 比 此 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

了 無 遺 矣 比 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

合 名 手 歷 歷 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

一 以 德 勤 謹 聖 上 累 年 之 間 而 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

乃 登 一 如 古 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

惟 以 五 國 公 奏 元 宮 敏 上 三 年 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

性 聖 直 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

大 特 是 也 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

可 名 之 書 聖 聖 之 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

及 以 家 事 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

故 以 必 聖 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

此 如 列 之 不 以 於 全 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

徒 合 而 用 指 中 之 詳 判 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳 傳

密 勿 石 有 按 聖 與 海 聖 之 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

一 詳 判 之 同 中 以 增 減 了 確 殊 法 有 之 聖 聖 聖 聖 聖

一 夫 之 月 如 抄 乃 在 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

由 而 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

卷 元 了 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖 聖

るる物語の類と紀事回解あり

以上巻四下迄

一 深川珠書録

文化文政以深川に在る時行男女の
事と紀事 馬琴の山陽本

留書本

一 傳演味玄抄 清星吹湖百著 二冊

北原本甚而物者あり

一 釣客傳 二冊

全上

東洋書院

一 何羨録 平北ノ某氏侯傳 三冊

全上

以上巻四下迄

一 下谷通志 山崎美成著 一冊

桑本林荒古本

一 わすしのちり 市井の歌多し 二冊

一 十八大通 一丸形前馬鹿抄 一冊

一 花睡考 一冊

以上四印言本上中下各別あり

以上初巻迄

一 黄鳥のうた 駒形とて記す

- 陰名考
- ききん十七傳の年 行考
- 毒切奴之記
- 享和の付角力記
- のろまの形詞
- 及古染
- 愚痴拾遺物語
- 刺月代始考
- 江戸大富集
- 起情文考
- 乞兒奇縁

東林堂

- 投扇新撰
- 戦代俚考
- 五尺手拭
- おかんのかたぎ
- 萬葉物語拾遺
- 玉砂考
- 心算考
- 雙六錦書裏抄
- 文三房四内傳
- 万載速略 文章草成
- 所人考見録

・古今の御免草 之兒如事

里川真乃提出

・情み子能義 馬場貞吉 四冊

・異聞雜行 日 一冊

・江戸落松 一冊

・やぶとやうく 二冊

但読をつらぎんを二一命の文
事のとらむもの

・上下書成考 二冊

本純提出

・心中恋の塊 五冊

東林堂

御免五つぬ 心中の事付松のもの

一 浪毒の八卦 四冊

一 浪毒の八卦

一 浪毒の八卦 大橋田舎館蔵

大橋田舎館蔵

一 畫巻録 一

一 浪毒の八卦

一 徳永日記

一 京橋談話

一 廿年間の覚え

○高木方より得て江月の奏指一帖
政孝の
延冊一枚を贈ふ

江月の書を、巻を画きうんく、送る

初祖大師

西天ヨリに波多くと

東土浄大儀

九年丙辰

琴の江月

江
月

朱文
白文

心をなすも
ゆるみゆ也

延冊と

東林堂製

地紙に梅の花模様、挿紙あり

和紙に梅の花模様の題あり

はさからしの書に於てうけつけ

このゆかりをいれ七葉也

初巻

正殿

同じ家々、古くは源氏物語五十四帖
と稱し、何れも別体、綴りも首巻を以て
正徳流なり、冬書、皆あつたし、名流の草
紙集、大抵各冊あり、書を異するも、
心紙もあつた、係りもあつた、又し、膳前

東林堂

田舎者、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻
巻、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻
とて、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

又家什とて、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

其角とて、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

其角

其角、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

とて

其角、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

其角、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

題目、(古くは)源氏物語、(古くは)の巻

南をぬき、翌日おとろしし年をいふと
そゆにち、彼のちりもあま

方心止之の経舟 題 印 梅

手物うらも書いちらりま

梅のあま

皆うぬをまふさしもの也

〇五丁尾敷心くし 桂山道印海一冊と題
そゆに海色華衣の題字ありて道印あり
一物も漏れん 華衣方し花しある由え

梅のあま

先年、五月尾敷くすけ若干部の印海
と題りけりてゆえんゆゑのなり是也

〇〇方ちあ良：梅のあまの

御名をきくし 御陳

列えんは道印ありて

方彼の幸田成友と

題しる印ありて

ちとらふ



梅のあま



若干部



梅のあま

○桂湖村より古物ありと蓮湖集古銅
印四冊を弄る。こん末に余の親たる所の
銅印譜中の傑たるもの、其氏存あり、
印の傳來と汪啓淑の關係とを尋ずる
古物あり

濟寧吳氏所藏古銅印章五石銘
首鄭其安序汪水都跋爲清中翰
數石見而心艷屢求卒不見得後
印函散失易初得十餘乙卯春其安
子愚門自金鄉持來六積爲印五石
吳氏物者多王刺史蓮湖購得之官

東林書院

印大司馬建威校尉鷹揚將軍趙城
右尉和印李彦汪賀等章一皆極精
妙 翰字一印易辨爲謝暉平羽物高
賢手澤宜与西其功必表益傳於
世蓮湖得茲多寶是以自豪手成
一譜示易茶熟香温閒忘評賞
其佳与湖中松淡園淮陰程荔江
注譜後先多入勝輝 映菰香林不傳
海内嗜古之人一時如羊次已也
乾隆乙卯仲春錢唐黃易

此印譜終之全の架石の物あり 松川

○圖書部科を早稲田女子師範部より置くの件
 (亦二年の進志科として) 本校の進志を以て
 月台専ら余分な事をし、以て部員主任を以て
 這の如く考へて、帝國圖書館の田中福徳幸
 四子、圖書部員、外、毒地又等
 を親き、活版の末、各科を略し、左の如く定
 めらる

- 一 圖書部科法 和田 2 1/2
附圖書選擇及収容法、貸出法
- 二 目録簿法 田中 3
- 三 圖書分類法 2

東洋書院

附圖書部科法

- 四 圖書部科法 和田 1
 - 五 書史 毒地 1
 - 六 印刷法 1/2
練習 各課に於て行はるる
 印刷、刻字を単位を以てし、数字
 の如く、略々定め、自ら手取りに於て考
 査せらるる
- 種外
- 書寫法
 - 統計法

- 七文書子
- 俳書一斑
- 圖書録全及著作格法
- 製本術

詩

明治四十年十二月廿二日夜誌

月名に於て字種と圖書録科とを互々をこし
 を以て矯矢とす。こゝに、あきあきと
 する也

口維新前の新書もあつたをさうしてさうく
 の改書も、此の圖書録科の改書のあ

東洋書院

を得たり。明交文庫四年中一刊するもの者
 也即

七しん子

明治四十年四月刊
 抄録

内外新報

明治四十年四月刊
 抄録

江湖新聞

明治四十年
 外四

中外新報

明治四十年二月刊

市政の志

明治四十年五月

存る同体録も半紙四ツ切五六枚を一
 冊とし通し丁数を附し発書とす
 の便宜を以てし、今より得るべき
 今書本也

日々新報

慶應四年四月朔刊

増訂合私版

遠近新報

日上

中外新報

十二号以下

公私新報

在る曰信載るは半角二ツ目打る

物と云ふるを由外新報に附録

一巻添えたる

由外新報字類

と題する冊ありて一巻と云ふは四冊

字の類字を解説を附し書を其

の便に成せしむる也其の字は紙の

東洋書表

印牌 とうとうまてる

外

半紙あり

珍事撰流歌

と題する一冊ありて一巻と云ふは

一巻と云ふは一行の字ありたり

と云ふは一行の字ありたり

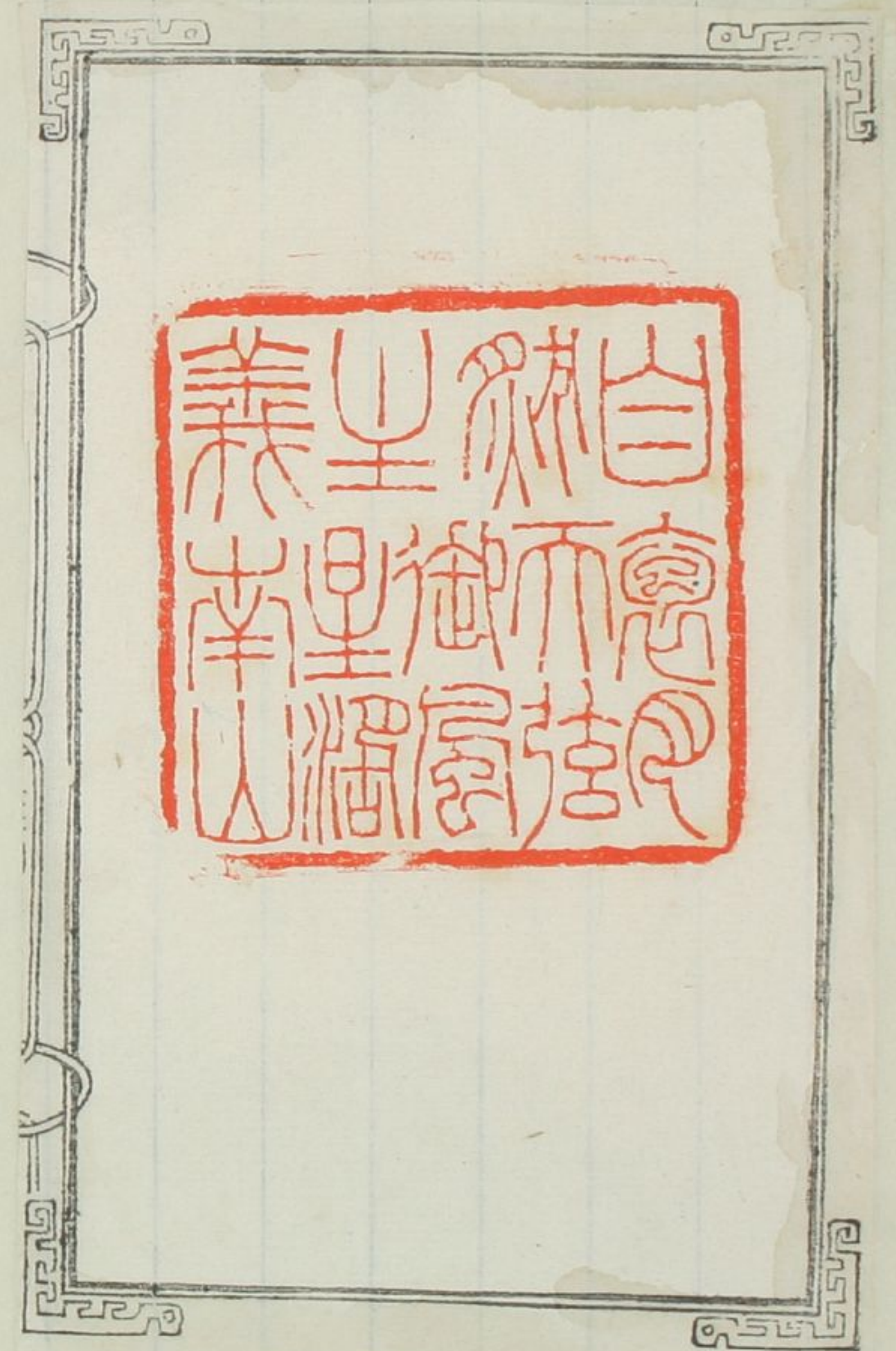
と云ふは一行の字ありたり

入き歌

○此は地印印印の唐書の南航印

と云ふ個と云ふは珠と結初より

余の示す二顆は布衣之臣に与りて
 白文と必信の社務とあり、真の社



と終し
 余を以
 しては
 正に刻
 を托す
 半は一
 畫扱
 一七奏
 刀先つ

東林書院

近イキの傑心也。もてさうしん常々此の白文
 の刻法をまとし一層鍊熟を以て成る
 古人に及ぶ也（明治四十年十一月廿五日
 記）

○越前福井一院ありて予が能刻師と
 したる三日月の本を以てしりあるが
 の勝り大子の史料論を以てする地由
 際左記のありて、福宮本を傳りて言け
 ちりて、天正五年の地を以てする
 こと、天正五年の地を以てする
 論を以てしりて、此の原を以てする

韓昌黎集

玉湖詩文集

文未む、五山版、教行と記す、乳中毛以
鄭義、黄山谷集、昌黎集、玉湖集、心
七番、^{所學}進了、唯此價、洪麗、^心いと
一く、^心容易、^心を満す、能く、^心を
懐みとせしが、^心後、^心を、^心入、^心感、^心する、^心を
り、^心價、^心を、^心半、^心減、^心して、^心賣、^心ん、^心こと、^心を、^心決、^心し、^心也、
由、^心を、^心余、^心の、^心報、^心す、^心余、^心山、^心へ、^心半、^心價、^心に
大、^心膽、^心を、^心減、^心價、^心する、^心此、^心の、^心も、^心四、^心印、^心の、^心方、
方、^心三、^心万、^心圓、^心を、^心値、^心す、^心昔、^心往、^心する、^心と、^心若、^心も、

東林書院

決して、^心價、^心廉、^心する、^心と、^心理、^心の、^心可、^心く、^心、^心唯、^心此、^心半、
福、^心の、^心文、^心庫、^心未、^心た、^心人、^心の、^心示、^心す、^心る、^心是、^心の、^心五、^心山、
版、^心を、^心有、^心せ、^心り、^心此、^心版、^心の、^心古、^心え、^心を、^心分、^心り、^心道、
逸、^心せば、^心之、^心を、^心倍、^心り、^心得、^心る、^心容、^心易、^心う、^心あ、^心る、^心と、
ん、^心と、^心終、^心る、^心之、^心を、^心決、^心して、^心購、^心ふ

玉湖詩文集の由、文集を十四行本^南末
本と、送利時代、覆刻せしと、稀者の
五山版より、惜しく、^心は、^心詩、^心集、^心同、^心版、^心と、^心刷、
り、^心き、^心補、^心め、^心る、^心寶、^心永、^心の、^心流、^心字、^心本、^心を、^心以、^心て、^心す、
流、^心字、^心の、^心物、^心め、^心し、^心真、^心粗、^心筆、^心の、^心心、^心も、^心却、^心つ、^心し、
ま、^心の、^心流、^心味、^心を、^心日、^心又、^心刷、^心る、^心當、^心る、^心文、^心集、^心と、

致嘉定丑十月 月 肝江張自紙の叙あり其
末義(一)まゝ子の跋あり善道(一)を多く此
の跋を翻し

○山谷竹集注

十冊

九行

十五字

整白版

此者善道紙集に亥冬十二月都内許子
の叙あり善道紙定土辰塚の跋あり
揚子故笛真誘に載する所のよ又同し
跋あり、宋版覆刻する所は版式鮮明
善道五山版(一)と聊り跋を異する所
あり、所人動てんば五山のよるありしが

東洋書院

と鏡小のんも仔細に見れば五山版中の一
も優色のよ、紙意(一)のあゆむ古八
方体迄の時代(一)なること二寸鏡と定ん
る也此者ぬ心寺意の紙なることあり

○毛詩解義

二十冊

十六行(一)字 六行本

此者山谷竹集に比するは版式甚粗也
紙も七五山版の面目を躍如とすはち
つと此版の存する所、紙に重んぜざる所あり
嶋田稿の真意あり

○韓昌黎集

二十冊

十行

二十行 式ハ十二七字洗の
可ク一定也

松平政元も流版と云ふ所流版

松平政元も流版と云ふ所流版

出来流版の字早稲刃の圓形版に書り版の
りし通ひをいへりて書しと出しエテお
とるきと塊づれり二三行の五山版のことき
美之清人に示すの料と云ふ事見え
冬よりりしと云ふ字を附する所四印ハ
文中やも定版と云ふ所五山版ハ
あると云ふ事ハ十山版と云ふ事ハ
結果の左

毛活

九十四

辨字集

七十四

山谷流集

七十四

北河内之集

六十四

(寛政十一年二月十日)

○松平政元も流版と云ふ所流版の字早稲刃の圓形版に書り版の
りし通ひをいへりて書しと出しエテおとるきと塊づれり二三行の五山版のことき
美之清人に示すの料と云ふ事見え冬よりりしと云ふ字を附する所四印ハ
文中やも定版と云ふ所五山版ハあると云ふ事ハ十山版と云ふ事ハ
結果の左

余の教佚を悉くりて人の集まる冊
とを係りて早稲田文庫に納めんとす
月林の記

東林書庫

茲に之を略記して同好の士の研究を促すと云ふ。

古書鑑賞の由來

早稲田大學圖書館長 市島謙吉氏談

この稿は、嘗て某文學雜誌の請ひに應じて筆記せしめしものにて、敢て専門家の覽に供せんとて書きたるものにあらず。さるを、今度都合によりて本誌に寄することとせり。乞ふ、讀者是を諒せられんことを。

古書古版本鑑賞の沿革を語れと云ふ御注文であるが、自分はまだ充分調べて置かないから、咄嗟に御話は出来兼ねる。併し御いそぎと云ふことならば、不完全ながら極めて大略を陳べて、委しいことは他日改めて申上ることにせん。

古版本も時代や國に依つていろいろの種類もわかるゝのだが、例へば國わけでも支那版、朝鮮版、日本版と云ふ風の區別がある。然しこゝには専ら支那版に就いて述べてみたいと思ふ。これを述べると自然また朝鮮版にも及ぶ事になる。

其前に一寸斷つて置きたいのは、古書古版本に對する趣味を所謂隱居趣味骨董趣味と同一視する事である。趣味そのものが既に實用とはかけ離れた意味を持つて居るには相違ないが、古書古版本の鑑賞もしくば研究と云ふ事がやがて一部の歴史研究であつて、時代の好尚の推移もほど窺はれ得るよりして云へば、たゞ一時的に耳目に訴ふる骨董趣味以外に充分の價値を認めねばなるまい。申す迄もないことだが、古版本に最も貴ぶ所は原文が比較的正確に保存されて居る所にあるのだ。ナゼ比較的正確と云ふかと云ふに、古版本は原本の正確に及ばないから斯く云ふのである。爰に一例を云つて見れば、幾百千年の間にある書物が寫しなほされたり刻し直されたりする間に、自然誤脱とか魯魚のあやまりとか云ふものがある。それを正すには原本に依る程の事はないので、原本がない時には、比較的版の古いものもしくは寫しの古いものに依るより外はない。これは實用の上から見た話だが、此點に於て古版本の貴いことは誰れも疑を挿む者は無いのである。著しい例を擧れば、昔近衛家に有名な學者が

あつて、『唐六典』を校定した事がある。十年の間の苦心で、一々引用の出典に遡り嚴密の校正を加へた結果、『唐六典』の全部を眞赤にした程であつた。然るに其後『唐六典』の古版本が漸く手に入つたので、之と自分の校定本とを對照して見ると、聊かの相違も無かつたので、近衛公は非常に喜ばれた。普通の人情から云へば、ヤレ／＼こんな本があることなら、十年苦辛をするでは無かつたとヤケを起す所であるが、流石高貴の學者であるから多年の苦心を忘れて大いに喜ばれた。これが近衛公の人格の高い處であると『槐記』に褒めてある。この事は一面近衛公の篤學である事を著はすと同時に、一面は一朝良書さへ得れば十年の苦心も積むに及ばぬ事を示して、古版本がいかに大切であるかゝわかる。まだいろ／＼適切な例があるが、沿革の部で追々陳べるので自然分明的と思ふから、こゝには此の一例で止め、さていよ／＼本題に入つて、我國人がいつの頃から古版や古書を尊ぶやうになつたかを考へて見ると、近世の人ではまづ吉田篁墩を推すのだが、其前に二三人を擧げる

訂を遣つた。其結果も學界を益すると尠くない。岡田挺之が同じく『羣書治要』に據つて『孝經』を校訂し、『孝經挺之解』を著はした。これも學界に功績ありと言はざるを得ない。序に爰に云ふが、支那に亡びて日本に存する佚書を翻刻したものはいくらもあるが、尤も大なる者は林述齋の『佚存叢書』六十冊であつて、近年支那の楊守敬が日本で多くの佚書を集め『古佚叢書』を作つたのも、述齋の業に倣つたのである。山井、片山、岡田諸氏の事業と云ふものは、寧ろ實用を主としたものに相違ないが、後年起つた吉田篁墩一派の古版鑑賞の先驅者であること云ふことも疑を容れない。さて吉田篁墩に移ると、氏は字を學儒或は學生と云つて、篁墩は其の號である。もと朝廷の侍醫であつたが、江戸に出て、醫を廢して儒となつた。有名な考證學者で、また藏書家である。寛政十年五十四で死んだ。其著に『活版經籍考』と云ふ物がある。篁墩の鑑識力はこれに依つて略々窺ふことが出来る。今日より見れば幼稚なものであるが、併し當時を考へて見ると、なか／＼斯道にかけ

必要がある。其人々は山井鼎、片山兼山、岡田挺之等である。山井鼎が足利文庫の古書につき經書の缺脱を補ひ『七經孟子考文』を著はした事は著名な事實であつて、支那に渡つて天子の四庫全書のうちにも收められた。これは支那人の驚嘆措かざる所である。これにつき近藤正齋は左の如く云ふて居る。

凡禮記は明清諸注疏本闕脱最多し。四五行より半面の缺脱あるに至る。七經孟子考文と對校して其殘闕を見るべし。汲古閣毛本は嘉靖本に比すれば其一二を補ふと雖も、亦殘闕讀むべからず。明以來の學者未だ嘗て禮疏を讀ざると見ゆ。山井鼎七經孟子考文足利本を以つて悉くその闕を補ひ誤を正し、千歲の下學者初て正義の定本を見ることを得たり。鼎は經本に大功ありと云ふべし。

兎も角もこれが日本で古書に溯つて經書を正した尤も大なる事實である。尙同じ様なことを遣つた學者は幾人もある、片山兼山(朝川善庵の父)は支那に亡びた『羣書治要』の日本に存するのを幸とし、之れに據つて諸子の校

てエラかつたに相違ない。一體篁墩は何人の脈を引いて書物の鑑賞家となつたか、其間の消息はよくわからないが、恐らく山井鼎の脈を承けて居るのであらう。系統論は委しくこゝに語る餘地が無いが、自分の臆断では書物の鑑賞は刀圭の畠から發達した様に思はれる。當時醫者が最も書物に親しみ、又家も富むて貴重の圖書を購ふ力もあつた所から、追々鑑賞の事も發達する様になつたかと思はれる。事實に就て見ると、篁墩以後明治初年に至るまで著名の鑑賞家の内には醫者が大分多い様である。即多紀樸窓のごとき、同桂山のごとき、丹波廉夫のごとき、森立之のごとき、一々擧るに遑あらずだ。併し篁墩を承けて尤も著しい鑑賞家は狩谷樞齋であらう。此人は津輕屋と云ふ屋號で、市井には富豪として知られた人であるが、頗る藏書家で、鑑賞力に於ては今も斯界の泰斗と推されて居る。此の人鑑賞月旦した書物の題跋は、楊守敬往年支那へ持ち去り、後版に刻して『經籍訪古志』と名け、日本にも來て居るが、是は東山美術界の『君臺觀左右帳記』に似た圖書界の名物帳で、又圖書鑑賞の標準となつて

居る。兎に角掖齋の鑑賞力は非凡のもので、篋墩などの遠く及ばぬ所である。『訪古志』の序文に掖齋の事と其亞流の事が載つて居る。

(前略)掖齋狩谷卿雲鑒別尤精。凡其傳鈔之源委流別。與刊刻之同異得失。一々考核其所以然之故。靡不明確。而挿架亦極富。蓋所謂好之至篤。擇之至精而且有力者歟。篋墩同時有若桂山丹波君廉夫。卿雲所友則又有若迷庵市野光彦有若實素小島君學古及伊澤蘭軒。相與上下其議論。而藏書亦皆頗富。云々。

この簡單な拔文でも、掖齋の流れを汲んだ鑑賞家の事が少しく分るであらうと思はれる。市野迷庵は正平版一論語』を翻刻した人である。又前の文中には無いが、近藤正齋のとき、幕府の書物奉行をもつとめて斯道に明るい人であり、又餘り名聲は無いが、近藤と同時代で最上徳内と云ふ漢籍の鑑賞に富むた學者もある。何分にも雜誌に載せる短篇では委しい事は述ぶる事が出来ない。併し漏らすことの出来ない一事は淺野梅堂(長祚)の事である。掖齋死後其藏書は梅堂の手に歸し、寫本の一部

所のものであるから、日本にある丈何部でも送つて呉れ、價はいくばくでも出すからと頼まれた。氏も其頃はまた今日のごとき書物通で無かつたので、そんなものが日本にあるや否やを知らなかつた。そこで東條琴臺に相談すると、それは林家の有名な書物で、玉巖堂へ行けば必ず在ると聞き、出かけて往つて見ると果して澤山あつたが、其時分全部六十冊で僅かに一兩であつたと云ふ。貴重な古版本其他が當時如何に輕んぜられたかの一斑が、此等の事實に依つて推量せらるゝては無いが。此書代は古版鑑賞中絶の時代と云ふて宜からう。さてかうも荒された古版本趣味を復興させた動機如何と云ふに、秩序回復が勿論大なる原因に相違ないが、一大動機とも云ふべきは、今より十數年前支那公使で黎庶昌と云ふ書物好の公使が日本に來た。それに隨行して公使より復かに書物好て又書物通である楊守敬(惺吾)が遣つて來たのが一大動機である。楊は盛んに日本の古書を漁り、五山版や朝鮮版を宋元版と思ひ誤り、當時二束三文の價で手當り次第に買収し、之が爲めに漸次書價を騰

は岡本况齋に渡つた。此梅堂は掖齋の趣味を承け繼いだばかりでなく、此道に大なる貢獻をなした人である。梅堂は京都の町奉行をつとめたから、其職權を利用して盛に洛の名山巨利に就き古書を漁り、其結果として世にあらはれたものも少くない。

やがて明治の維新となり、古きを破る改革の勢猛に、古書も珍籍も反古視せられ、誰も顧みるものが無く、此間に失はれた書物は價に積りて何十萬圓とも云ふべきものであらう。上野の戦争の頃、東叡山の寺々は書物を兵燹で失ふよりもいくらかの錢にしたいと云ふ所から、淺草雷門前の淺倉屋を呼んで、立派な『太平御覽』や『群書類從』等の類を一兩でも二兩でも賣るから引取つて呉れと頼むだが、淺倉屋も場合があるから御免を蒙ると刎ね付けた所、そんなら只やるから持つて往けと云はれ、淺倉屋も不性無性車に積んで引取つた位だと云ふ事を聞いて居る。又嘗て寺田弘氏から聞いた話に、今から二十年程前氏が清國に渡り王紫詮に遇つた時、日本には『佚存叢書』と云ふ大部の書物がある、支那で最も珍重する

貴せしむると共に、久しく中絶の姿となつて居つた古書趣味の回復を促した。書物屋などは京都あたり迄態々買出しに出かけて、名山巨利から宋元版は勿論正平版五山版のごときを反古値同様の價を以て盛んに買込み、此等は何れも楊守敬の手を経て支那へ持去られた。黎公使并に楊の持去つた圖書の價は恐らく十萬圓に上るであらう。池之端の琳琅閣で取扱つた本丈でも三萬圓に下らなると云ふて居る。楊も最初は朝鮮版を元版と思つた位で鑑賞力は乏しかつたが、熱心に漁つて居る内終には非常の鑑賞家となつて、日本人がウツカリして居る内に珍寶たるべき古書の大部分は支那に持ち去られたのである。今日から考へると、日本に取つては之が非常な損害であるが、また妙なもので、之が日本人の古版本に對する注意、一種の古版熱とも云ふやうな熱心を惹起す動機となつた。早稻田大學圖書館へ田中光顯伯から寄贈された卷子本皇侃の『禮記』の義疏も、支那に取去られんとしたのを、故島田蕃根翁が田中氏に請て買ひ取らせたとて、辛うじて存して居るが、これは正しく唐人の書で、

其一巻がまづ千圓の値打がある。内府の外にはこれに似よりの書物はどこにも無い程の貴重のものである。こんな鹽梅でひどく邦人の或る部分の頭腦を刺激したので、爾來鑑賞家相踵て起り、書價も空前の高價をあらはす様になつた。而して目下圖書界に林立して居る鑑賞大家は爰に一々擧するの違が無いから、一切省く事にする。最後に述べべき快心事は、岩崎家が近く支那有名の藏書家から一括十萬圓の稀觀書を購ひ入れた事である。其藏書家は即ち函宋樓、十萬卷樓、守先閣の三大庫を擁して居て、久しく我邦にも聞こえ高かりし故人陸心源の遺書全部であつて、書樓の名が示す如く、宋版丈でも二百通りもあつて、實に珍らしいものが澤山ある。それが我邦の富豪の手に歸したのは、往年楊守敬に珍本を取り去られた騷を一擧して撃つた様なもので、何だか愉快で堪らん様な氣持がする。

の書言は物物は其を
 十程故の命の言ちうと
 ずき里の真をたに托
 し湖をてしめしめ日
 領り字をさ登田名不
 為の原を口と腰字
 せししもの由りて登
 のも花をもと流集
 お取取しつるけ四書
 あり由空と黒然印
 服系つつ混入しあ

東洋書院

るより外に各海に山林河海に二書を托
 しそよりいふもるをさるとそのは物物
 して此の言ちう

因りてそのり柄本確せ出段の樂翁公
 高り文ふよるの徳ん命を右画お流
 とぬりけそんを左の部つとまて
 新流しよしと記ちう

一人に服系つ

・言ふ室つ
 ついばい
 意ね入居のあとも

城郭 寺屋 河原 寺観
市村 衣箱 馬舎 垣塙
門戸 屋壁 柳礎

・ 武具門

供御 儀物 舟車 輿轡
二 匠利用 庖厨 家什
半 一 皇 杖 鞋

・ 兵具門

治録

山林草木河海

後編

拾遺よせのりもの

答るるの事々之れも亦も亦の武具は
しあると心と心は葉も葉も
すも亦も亦しあつとるを
誤りて武具教供しつこと
似たり
〇〇〇の海河の文
しまりの昔
信及の〇〇
んんん副

と往後をしき福をたもたせしむるに
を帰しきしものをもおぼしめし
とまきの手しつきの使田しつり
もつらふしつらふしつらふしつらふし
遣ふま荒る谷の深き寺ありし
又火らるるつぎのつぎのつぎのつぎ
日とつとつとつとつとつとつとつとつ
のつとつとつとつとつとつとつとつ
あつとつとつとつとつとつとつとつ
行とつとつとつとつとつとつとつとつ
あつとつとつとつとつとつとつとつ

東林院

手澤の功徳のたもたせしむるに
○又つとつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつ
あつとつとつとつとつとつとつとつ
ちとつとつとつとつとつとつとつとつ
あつとつとつとつとつとつとつとつ
○此の文もつとつとつとつとつとつとつ
とつとつとつとつとつとつとつとつ
あつとつとつとつとつとつとつとつ
此の文もつとつとつとつとつとつとつ

考証のありき尤も甚しい方の記がある。此に
くんにき神山浮海の目録本と換言して
このいぢりうもはるあやし

○五塊し流し山あけありて山原其方指の
一族ひあるとてふもあやうき事なりあま
いふ流石のことども終地む先かたあし
いふとてふ事一のせ果る事いふに流石
の著者のゆゑ流石なる中の古印と
あけしとてふ事いふ。日本国に
印し多々流石義隆系印一割符(いんじ
一書の半分)に記してある印もあつた事

東洋書院

の三點と指しとてふ事いふあやしの事を
いふの事いふ。此にいふ事あやしの
山に流石の傳はつた事いふ。此の
世早をいふ事いふ。此の事いふ。此の
いふ事いふ。此の事いふ。此の事いふ。此の
此はいつてその事いふ。此の事いふ。此の
の事いふ。此の事いふ。此の事いふ。此の
事いふ。

○三輪河原の事いふ。此の事いふ。此の
事いふ。此の事いふ。此の事いふ。此の
事いふ。此の事いふ。此の事いふ。此の
事いふ。此の事いふ。此の事いふ。此の

拜跪 礼人の誕辰荒くは忌辰に其
遊墨遣(付)と云るの回ぬお屋しと
お人を徳いふて其の儀名を研定
するに依るの事起るんことを
考ふに餘も本館自ら揃うる来
北其の儀小山のり清あつた
辰いあるを揃し 終る本館
訪及も氣をを取う一室に陳列
不充分なりと地元の人多く借る
師と終るなりあるも河原中本館の
敬哀を諒秋と一回日午後山一

東條原製

神貴臨と仰らる其の由も陳列
いふもあつた(遊墨遣)の事
画遣(遊墨遣)の事(遊墨遣)の事
指の音一と上 神陳列おあつた
他之名の家のを(特)自本
：限(七)附属と陳列に部
この一二人指時代之由に指
了一二三流を指指の音一を起し
が只考希印此を石神あつた
身得考希印候敬自具

月。

早稲田下り丸園あり
故去市場海吉

○木片初通と経るも母子松浦哉官が木
片を全圖の紙交し幕の一器と丸の生を
作りたる初通と経るも流るるも
年の取も一器と丸の生を
の命を載せ、毛羽の一器と丸の生を
け、生をの各印も一器と丸の生を
り別記するも一器と丸の生を
も空多し印り得る。故に多し
板心一器と丸の生を

東橋
京橋

林をゆるに、生をの各印も一器と丸の生を
名院古利の舟も找るも、生をの各印も一器と丸の生を
きも一器と丸の生を

オ一 東京

市河万香

根跡四天王寺元和兵九の隆西川の燧
杖鐺弘法大河草作也如本轉法輪
所高極血ホ土赤木つ中心の轉法輪三子
是河来、骨をも所經臨者在、秋地月、
市下入口の郊、用の郊、し、ゆ、ん、
一、せ、の、あ、り、
上つ世のちりの路も、今、え、ま、り、さ、る、う、き、の

あんなにさういふ

才二 糸糸

蛭川式流

南部興徳寺古流板

北中宮の石瓦のつくし用也

才三

紀州

熊野早月

吾々流

本名城津原藤一板

中三尺二寸
長三尺半

保皇太閤

建業之板

割三板 六井井古柳西番板之用也

才四

飛鳥

巖崎御方

村田良徳

海中大島古楠 平板古流集公所立物也

玄彦也

東林堂

古柳の戸に用ひ流木同を立下板

才六

西京

山中位六の

城守為山下海月橋々榎

板

板一乃り用也

大流板の形也 杖を合ふに得るを流木と云ふも
くさくさ各々由緒有る 歴史的な杖を集めたり
苦心をのめりていふやうに 昔も流木と歴史的
と題して 昔も流木の板ありていふも 流木と
いふも十八畳と為すものやありて 初流也
る木杖と云うて集めたり 一畳と為すを加へたり

山の肩頭をききしし類と見んことをも
とむ即ち議しと示す、此人とある山のつ人
とある山の道又とある解、輯のそ、やま
とあるしき、この七の、とある、ま
松陰の出四録の、の、七、抄、し、し
えん、と、谷、正、と、清、ん、ん、ん、ん、ん、ん、の
手、え、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
う、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
と、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、ある、
を、以、つ、て、え、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、ん、
同、い、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、

山陰抄

う、し、の、う、う、と、ま、田、抄、る

の刊の、え、し、流、通、石、十、行、を、備、具、す、る、に、
其、の、抄、抄、と、抄、ある、う、抄、を、の、ま、き、す、の、中
う、ん、と、も、田、文、の、而、各、き、路、布、と、し、未、刊
を、し、き、う、抄、の、抄、と、う、う、う、う、う、う、
か、う、う、う、四、行、四、十、色、の、本、を、得、る、の、者
ある、う、う、う、う、と、も、ある、ん、ん、ん、ん、
此、方、に、依、り、し、し、し、し、し、し、し、し、し、し、
甘、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、う、
田、田、抄、抄、と、抄、し、抄、う、う、抄、抄、抄、抄、

入據入代京城阜山嵯峨方々山嵐次丁卯、寛永四年
丁卯、後の方を俟

任飛訪古志

新刊五百家注音釋唐柳先生文集四十五卷 舊刊本

無序及跋文編注各氏未詳每半板十行行二十
字注雙行目錄首載序傳碑記紀此本歸化
明人俞良甫在嵯峨時所校刊卷末有記云祖
在唐山福州境界福建行者與化路莆田縣仁

德里其重諫坊任人俞良甫久任日本京城阜山
或年芳鹿至今喜成矣歲次丁卯仲秋卯題述
唐市仲克亮跋此書云余嘗為韓文古板全印
後又得柳文古板殘本補之三公之集合刻
竟全柳文未有印而記俞良甫所刻及歲次
丁卯按古板傳法正宗記卷末云福建興化路
莆田縣仁德里任人俞良甫於日本嵯峨寓居
憑自己財物置板流行謹題亦不記年號及
支干古跋月江流錄末記應安三年六月初旬
良甫自刊月江流錄據此歲次丁卯當即嘉

慶元年丁卯歲在辰辰古曰録云京城阜即
嵯峨北言是也日録又云歲次丁卯豈謂寬
永四年丁卯乎此蓋辰辰唯依法字正宗
記書末所記而未看古收本正宗記及月江法
録故誤而已文政辰辰秋前一日

(以上二件甲子年三月廿五日)

○久入心辰念慈念(五回)

明和四年三月廿五日

七十四回其の辰念

前掲の如く書り早稲の圖を横上にて行し
つゝ、横上を接ぎつゝと其の道の邊
と指しし香花を掲げ、其の道の邊
父田中本なるものあり、曰道(星)添
堂茶と題す(句集)其の道の邊に并
其の名紙を添、其の道の邊に并
し、其の道の邊に并、其の道の邊に并
左の如く書り、其の道の邊に并

南史文苑傳各多異半松田大子の同人付り
本行強^三辨^三終^三七^三代^三名^三一^三長^三的^三ら^三臨^三海^三
の後^三首^三の^三者^三數^三名^三を^三、^三高^三り^三左^三の^三中^三を^三過^三急^三
孰^三昔^三年^三と^三作^三を^三、^三元^三と^三抄^三を^三、^三此^三の^三終^三を^三
窮^三り^三乃^三ち^三右^三の^三抄^三を^三了^三の^三印^三を^三了^三す^三



録
校
用
表

○すむる年位を埭士とあるの件は坪井文神
夫と自書に流をいづくの事を流す、流次
多能系、魏刻の困難流出の、坪井より三
國文記を魏刻するより抄正の困難流を
流す、さうするに本をいづく、甚しきり、甚辛
の未終、任本をいづく、是れありかお候
るに版本より但し流流字をいづく印刷
の思ひのより多能の末のよりさうするに
くは流し部を流く、さうするに世衛家
に此の流字をスキヤし流す事あり、之
んとお候し、僅うするに目的をいづくをいづく

リと、ほ井のろろを多読文七冊と
車初殿を泥流言をろろしきると
くは流布一校本と泥流言をろ
刻しと移版とまもしとの歌記し
以て後のろろを後つ

〇刊食をろろしと胞痰一冊を
くく胞痰もろろと貞和三年一
行のろろ初めをろろ行りん
のろろ行りん行りん、胞痰
うのまじろろろろろろろろ
つき北を志おろろろろろろ

殊様

る全三冊七八枚、ろろろろろ
ろろ初書をろろろろ、胞痰
〇此胞痰を潔の遺書七のろろ

旅ろろろ早稲一奇路しと来た一
指しとろろろ、右胞痰本心
自本のろろろろろろ、事ろろ
ろろろ、北男ろろろろろろ
味とろろろろろろろろ、海
ろろろろろろろろろろろろ

抱負を多し嘗て子親の作を以て
しと云ふとこそ其の甚しき事なる事業の
何ん成じとて一夕奉り自表の懸
初も程鏡を以て自殺を遂げれ
のたにとも十年前其も前の心
のあふは情らふき抱ひある言の語を
受けし母是れを湖泊者の印を
授け又同人に在る自殺の事や悲
しむ其の遺物と傳し遊しと在る
遺物と云ふは、其も早稲田の
えそよの事と云ふは、此の遺物も

東洋同業

此の事とて天才の如くみえぬ早
稲田之事と傳ふ事と云ふことを
こゝに記す事あり其の事歴の事あり
と記すことあり(四十一、三月書記)

○此の岩崎氏の如き事式と仰ぐ朝二
りたり大いなる早稲田の事あり
念の心を傳し其を稱賛し且つ其
余も一々天中在景の鹽底の事あり
是れ一技と云ふ事あり其の事あり
是れ一技と云ふ事あり其の事あり

んを早稲田の文を手に執らんや、此の
今も早稲田の文を手に執らんや、此の
のりやまゝいふをまけまはしこしこ之を
る方を多くしや、此の早稲田の一部を
に流敗をもしし上梓を、埃の
既之言を一版とすし、靴を其の
をし著者の姓を七かくし、し
言すくまふ也

名家の書好のとき、花書は味あり
とて、殊に其の味あり、其の味あり
子好の年、いふに、

おと一版終る果現紙料し、
花書は味あり、其の味あり、
貴之をとり、其の味あり、
既之言を一版とすし、靴を其の
子好の年、いふに、断片のこと
き、之を流し、其の味あり、
のりやまゝいふをまけまはしこしこ之を
の既をわたり、其の味あり、
花書を其の味あり、其の味あり、
とて、既之言を一版とすし、靴を其の
す、いふに、其の味あり、

奇全をうらむるに因りて、
とありし大心は、
くもくりといふの
末の記

○方天竺の書好く記す、
尾出の玉より并印の
ありしことを首尾に
めしし、丹陽四望の
をえりし記す、と終
四枚を合綴し、一
幅の題、
幅の題、
幅の題、

東林居士

元野白事、
書、
家、
先、

書、
家、
先、

又云

明況壬申五月十七日
お下目録

別に大心、
を附す

此、
の、

此一巻の何人地
 記ありて
 備忘録
 此ハ年長
 一七〇
 此ハ年長
 一七〇

中田 孫五郎 新井 常三 高橋 宗徳 竹本 宗徳
 此ハ年長
 一七〇

中田 孫五郎 新井 常三 高橋 宗徳 竹本 宗徳
 此ハ年長
 一七〇

此ハ年長
 一七〇

不帖中二三石のりありて元油のり。結果は

一七〇

のしつとて四十一年に其の事を司る金簡とて
この別は欽定武英殿聚珍板程式一巻を
作るとなるなり
四年令考徳目の十二さてこの
この式のすしは武英殿聚珍板考を刷
印しつとてつくりし。この程式ハ其のすく
る流さつとて出来、其の浙江に故も入て世上
の人々あるにその、武英殿聚珍板考の
目録と彙刻考のありしを誰れも其の
と其の考をすくすく、此と人あつても
一部二部流布しん多くみよとてその
一と十年友人松原心齋四十祀献上

武英殿聚珍板

しん今と柳山あり、しんらもさきと依仰
毛利氏よりもあしと献上し又る其の昌平
寺揚子も二三部と舊紙をうりて大凡と
しんもこの聚珍板考も本邦より

○大分県史の地理志部とち山の著述し
うらとそふとて村に良湖分ちららの
源流をきりて著りしにそのあり、たに
てま他藩の考あり、年を觸ることを
許すぬ、そんうめ打らも納むの上で、他
人のん考を自ら著りしにあり、代村

馬子おろ角の甚心を埋没す附するを遺紙
とし強んじといひ授る地法を自分の名義
ひ出給しと

○崎田里村の宗殿の史記をさうんむる
しのかあうしが佐の古版おとせし前年
中か南英文をそと移りあしし家由に
岩海家、諫津北リをさしし家とさし
とそる又南英文をさるも或所を挿入し
ととやうくうあるも崎田家より移し
とそる

東林書

○涼氏小鏡(良純記)等(四本本)の

子流ゆゑまき画のま紙(香紙)三冊と
辨ふ乙卯ハ古抄了仲の檢あり標本と
まきまき直本也良純記をハハ本と云い
又留恩既を華原本とも云ふ

北本館に納む

○海表新(七代目)の似類十五
を初代豊(四)の初若しん言しとるよの(馬
控彩ももえん何んの上出まき)を帳に珠
りつけ(四)の上又三本一々(四)にあま
しる向を忘るめ(各本の初雨)の印を

人の出まことそふと北ひあをそ即して元つん
後うと終由藩あり有りその花を七新
又出し日暮お沙河：こころう前うと
卯年一筆や錫箔幹とそふ人の橋木の好
全をきりこころんとき足利藩：こころ
子秋の園者を引つまおる庭ごもり
うと紙房をを呼らしそ美印しこその
と美紙房をを呼らし紙のこころ紙料
うとそそふの文を並けぬきあそを
御免ぬぬとぬつたのうとそそふ
おびりるそそ木版の残つそそ

北店改漢

こころすむあそこころを免うとそ
こころ紙料とそつたのうとそそ
のうとそあつたのうとそそ
の上の園者とそつたのうとそ

美人合身也鏡

北店改漢

京傳の草む錦傳也有り後のお結とそ
つたのうとそあつたのうとそ
末物海流の庭の好もそ
所出ありそそふとそ大改創とそ

年申下申の月を繕入のしるはるる、とて論形
をもたふ傍らに上部に美人の書と題と載せ
あり

少将の書

言は新片、そ人エセするは

のしるの首尾共に開く

人見求の跋あり、亦人見反の
る好と見えし、とて御覧の書に御覧
とあり、いさゝか、和の物に御覧あり
との説も七、とつて、御覧の書に御覧

原本

このしるのしる、御覧の書に御覧あり
とあり、御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり
御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり

甲一四軍一艦

二二

光

信長

御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり

光

御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり、御覧の書に御覧あり

高橋三河叔部宛

高橋三河叔部宛と訂正せし

この

浮世くぐり

十行本

一

あやふしきものありしを
のりももろくもあつたもの

高橋三河叔部宛

刊

一

芝居たしめ

一

口 ねあは

一

高橋三河叔部のあやふしきもの

高橋三河叔部宛

高橋三河叔部宛

一

高橋三河叔部宛

高橋三河叔部宛

言

中

柳屋

一

一

高橋三河叔部のあやふしきもの
高橋三河叔部のあやふしきもの

高橋三河叔部宛

一

を印出致した心掛のありはしく此方の
其尾に五代史続出とありつとる。目とん
と胸うしに估すと其尾に現正備が
大字と書えれ致うあるとん一と云
つとありし即ち物しこ、うぬれ佐の
先とるしとる

(昭和二十年四月亦)

○早稲田の文彦と東海舟の治岩 風景本地
か二帖ありしとるを自分うとせしとる
このひある珠塔をうし解つとめ方とん
高田吹雪うし出た早心田所を宮の草
かとるをそらに致う向山黄村の花赤印

東
林
表

う掛しとるありは、市書館のその書いひある
ふん日ゆとありしとる向山草の
此所々にそらに人ひありしとる
あつ七個ありしとる 従令その書いひある
おとしとるも夢印の宛が書いひある
このと和し得るし、そのと致をこしとる
えは、そのかの是れを和しし、その書いひのつ
人さし、そのとつと、此をを致う出とる書
と此所々に行きとる、そのとありしとる
し、そのとつと、そのとありしとる、そのと
かしく物をめいし、そのとありしとる、そのと

う松浦武甲とをこの親友とすしこと
甲令書の松浦武甲と莫逆の書物の
うししことを懸き結をうへ合りし
その書に何れも履跡まると長も徳
流のこころ草書に書すと好し得る
よ也此とく松浦武甲スケツケと心
りその書に結しし河もせしる圓年
ふの向山にさし回家に傳りし
吹雪う武甲とあやの關係し
し終るうの向山に結しし
武甲と一とるう風書とを心し

東林書

と書ししもの其のスケツケと
書の彼を武甲と心し
怪しとす

○此は大隈の過りしと正しく
校も和り何の古書も
と此のうらまはに
うらまはに
いしもの宋版の文
が書し文を
修氏の書の印
う各書とす

流石と云ふ、余は是れを我道結う
御道 万葉左の如き説と云ふ

余の是れは、
是れ余をこゝに、
りるは、
上杉氏の貴(おろ)

新く、
言ふは、
かゝるは、
の言ふは、

東林原表

自合の説と云ふ、
是れを、
あゝ、
昔、
こゝに、
所、
中、
風、
の

何れも、随々を圓者も又永母の行
と云ふ、何れも、えんあう、ううまきを
の伝わり

と一ツ節のやうな事、さうも
を毎年行ふ、と云う、さうも
り、毎年行ふ、と云う、さうも
大層の事、と云う、さうも
あう、と云う、と云う、と云う、
も、と云う、と云う、と云う、
の、と云う、と云う、と云う、
行、と云う、と云う、と云う、

聖書、
う、
い、
味、
あ、
行、
あ

全體、
所、
の、
の、
の、

う物味あきを得しうを謀く貴い様
園い是和の町民に此の靈物と其の域
田よりしてそのもの論者をおも
まのが表うし一方も何一方も非保
の故びあうさ其のお難うこと天徳
み言さうあのお通があう、そんをよ
油和たることと国らと交あむさ
ぬやうしとよく油和を保ちぬか
とさうい問起る、自分の前は(木)に
町内のもう物とて再思とあはれ
物菜と可食とすものも要する油

東洋

和と園とをたすの事あ(う)き
のてあ

お是れを我の道徳園者物とあむ
と一ツ書物つらうのと様もあ聞
園者も様ととととと(木)に
ふいとさあすもあ、んも六市売
油和を園の一本あうとあゆむ
の道徳とあうお説するもあ
ふいはら貴主の園者う(木)あつても
町民の貴い心と生しう、産金貴

が文字反的の貴ぶらねるる成骨基的
の貴ぶる道もあひ改る國者改と
あひらき言ふを互へまけん成るん
而して此の町由の言ふを無へんと
成り成業を以て生かすとする此の土
地柄こそめし 核業其係の國者を
多く作り核業家なり此の國者終に
持たぬ統計にも國者も七在るに
聞ふ言ふ柄入りん成るに初め言
業家も國者改利國の真味を解
しこころは神如う出来むあらう

●北
●國者改のあらるるもこれより割
りぬり初めをまてあらうと思ふん
大い改のめき改らるるも國者改集の方
とてそを改道する改るの改るに教
るものを解かしては教へては
よるも是れ町改を改め集る改るの改
るを改る改るの改るも國者改改
此の改るの改るに改るの改るも改
の改る改るの改るに改るの改るも改
改るの改るも改るの改るに改るの改
しこ改るの改るに改るの改るも改

ま
あ
ひ
ま

和ふ帳を言し保を言しとのまうと云は
入蜀山自布の致るまう回く地帳や他
来り手帳と予に判る帳を換し一帳
とありともとよ帳念のいそぐし一
いとゆるうきうつせしうは後ちあ
るん唯紀の帳と予に帳と帳を所く
二帳とよまといぬは蜀山人と
紙敷のなる板と注と出帳との花
印あり、えんあ白若く紙の花本と予し
とを後う流く受けをうしとよまを後
う流くあはれはあゆまは流るる

東
様
写
表

ある本と思ひあやまらざる事案の便を物と
辨ひ得る事、このまうと思ひ記すこと
りたる蜀山のある帳珠浪の年
月ありともあま予にこんとゆんとも
き行しなまやまらんとまらんと
まらんとことあり、まらんと
この換言をしる事、也、ある本と
あまのまらんとまらんとまらんと
とまらんとまらんとまらんと
くまらんとまらんとまらんと
まらんとまらんとまらんと

い得やく而あくそくしんばをん七録し
めめをを換考ししるんを所し信
り受けたり
(甲子年五月三日)

○を修り終る文禄の活字本と其本あり
ことを知るも其前より古文者既あるを信
しゆらんを。此の古物を何んかあるか
ものあるらんを。記帳し徹しるるを求
るも早く版とるらんを。兼め明くさ
る所を記を。選りしるるを。あつたのたのたのたの
まうしゆ所を。信のふらま。古文者既あり
まうしゆ所を。事とを。しんか。あつたのたのたのたの

東洋書院

りたりとて本つ。賜うることを記す
即ち此の版と勅版を。しんか。活字本
の最たるらんを。うと。あつたのたのたのたの
とあつたを。

○を修り終ると。堀潤し刊の金本。修り終る
十段。採り用するべき。信のふらま。の版。編として
たの二三書を。抽出す

一 國の沙汰 抄本 一冊

延慶元年の分帳 ありはるるに記す

を記す

一 去る由十四人 一冊

近寶版 佛人其角の如く

一 潮来考 其抄巻の著 言 一冊

潮来のり 臨潮本つり

ちの浪を

一 裏名温話 言 一冊

江戸風俗 関する随筆

五十四頁以下三行 帝皇御方
：存

〇元典章一なる由赤湖南支那を言し
リしもの元々一えんと支那も終りに終るもの
あり二條をより内なるあり二人のありありあり
此以て支那に於て上本のなるもの終るもの
見えざるを奇せしなり二のありありあり
なり

漸有網維之日朕獲
代之定制建元表歲
一家之義法春秋之

初廷草創未遑潤色之文政事變
旨服載擴丕圖稽列聖之定規講
小君人萬世之傳紀時書王見天
止始體大易之乾元炳煥皇猷權

其章一臨劍一
建虎為中統元年准即

會同之亦五各事並奏下辭中潛組其初經大興市告中

初關致初在吐魯土階伏燕京新營室室令立管階四太

其國階階中統五年八月 日煇奉聖旨中書省奏開平

在百燕巒千至剽姑茲臨示默宜映悉

...

此以天子之於上天下之於天子也
見天子之於天子也
天子之於天子也
天子之於天子也

東林書院

武定四方淳德御羣下朝廷草創未遑潤色之文政事變
通漸有綱維之目朕獲舊服載擴丕圖稽列聖之定規講
前代之定制建元表歲示君人萬世之傳紀時書王見天
下一家之義法春秋之正始體大易之乾元炳煥皇猷權
輿治道可自庚申年五月十九日建號為中統元年惟即
位體元之始必立經陳紀為先故內立都省以總權綱外
設總司以平庶政仍興利除害之事補偏救弊之方隨詔
以豫申畫於後條畫各見本類於戲秉鈞握樞必因時而建號施
仁發政期與物以更新敷宣悃惻之辭表著勤勞之意凡
在臣庶體予至懷故茲詔示想宜知悉

建國都詔

中統五年八月

日欽奉聖旨中書省奏開平

府闕庭所在加號上都外燕京修營室室分立省部四方
會同乞亦正名事准奏可稱中都路其府號大興布告中

うらやう

○高師立削版の首標彦冠義疏ハ宋
梨の二反刻本を以て古本或はこれを削
版して傳ふべしとて削版を以て
補ふべしとの誤説ありしと本文の
本木版を以て終を定めて削版を以
て改文の削版を以て終を
全部を削版と誤解せしむる
或は末文を削版を以て後人の添
かして終を以て削版を以て終
かを終ふとの也と云ふ削版の

東林堂

削版の一部を以て削版を以て
せし誤解と云ふ可也

○公平版古本板木を以て帝心保物
を以て保るる保るの事下に徴す
は狩谷棟高らに文政の北の古版木の
方面削版を以て三十二枚の坊間を
以て保るる事とて削版を以て保る
ハしるる事保物削版を以て保るる
削版を以て保るる事

○元人命良甫の削版也(日下入於也)柳

文釋文のまゝにぬたやあつてもよくし誰か
あつてもよくが此の亡命人が此の傳も
多くを著し開版せし事山を著し
り傳はしむるにんしえんを著し
てこのたの國を著し即ち此人の上梓は
傳へ

李善注文選

徐法正宗記

春秋任傳集解

康柳先生文集

昌黎先生文集

東洋書院

月江詩經

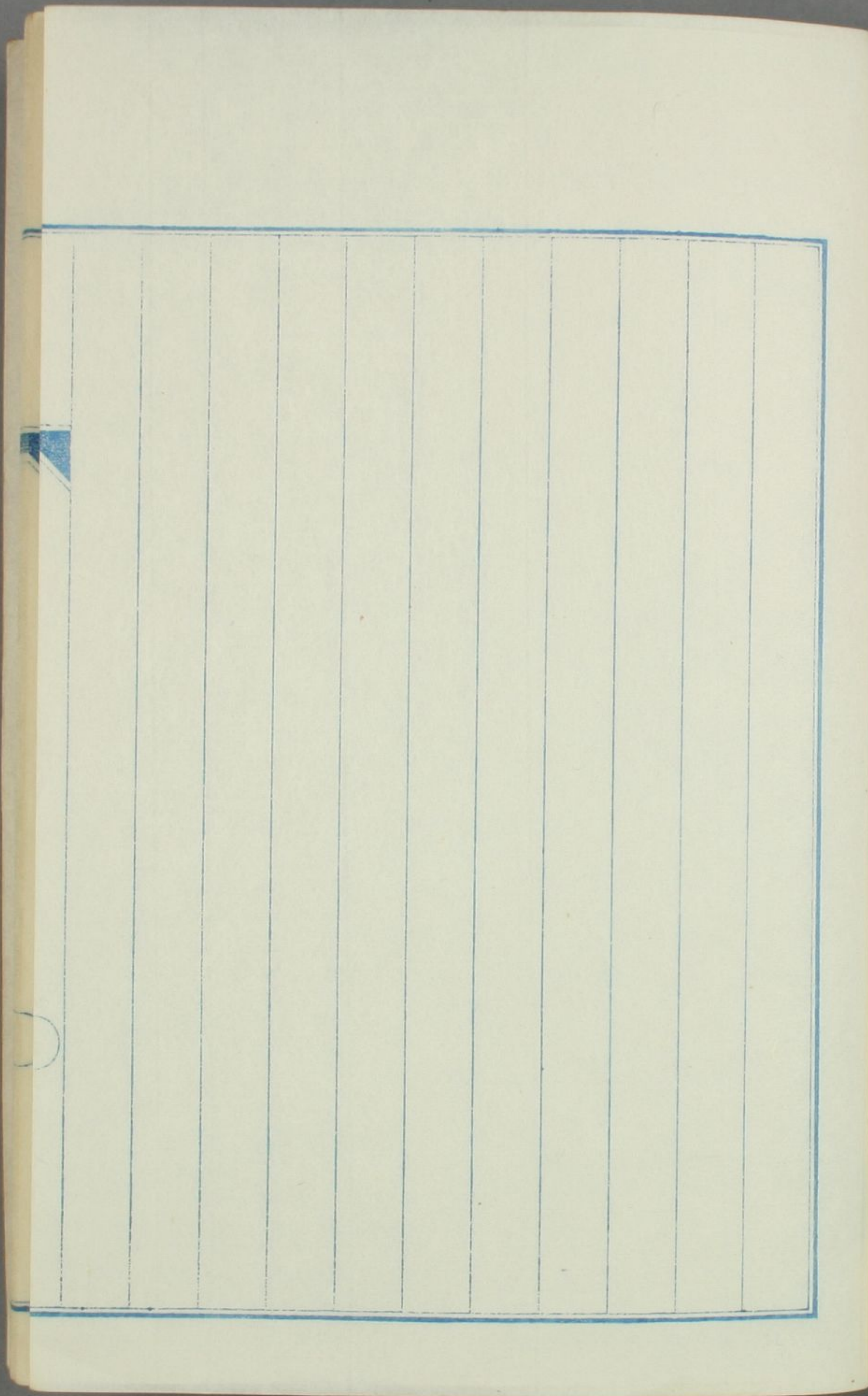
應安三年

紫山文集

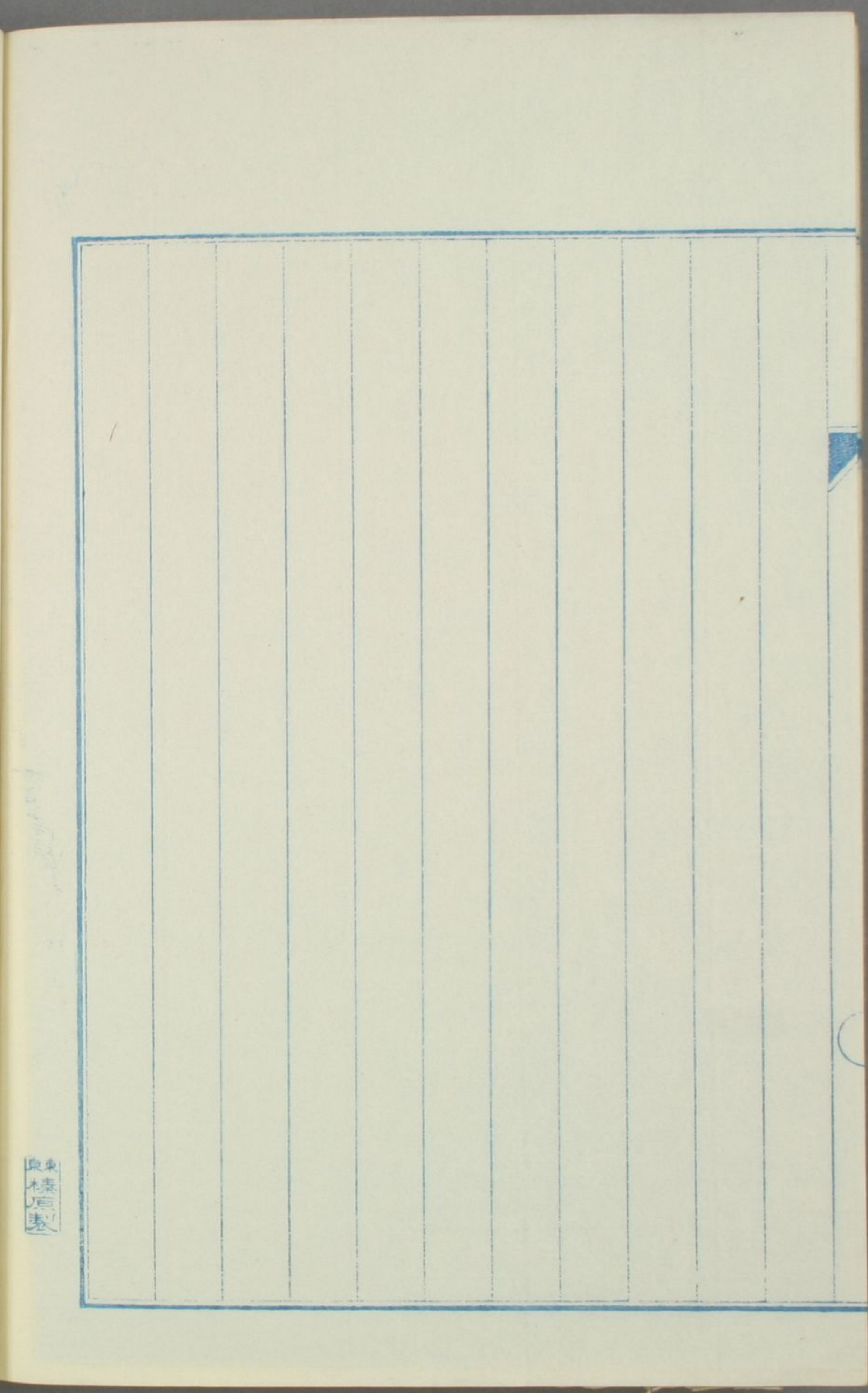
應安五年

澤庵孫の傳者の開版稀なるものゆゑに
此の亡命人著し即ち大都の書を著し
開版しあつたもの著し交成せしこと
大なるもの著し此人の國
書を著し開版せしもの著し
り大なるもの著し
て見ゆるに李善注文選は自辛
亥四月起の至今苦難始成に徐法正
宗記は、憑自己此物置板流行に

柳文の或る年号麻至令長成矣と自
の物と勘ち自の刀を抽ひ板木の
刻の深きこと敷十金其刀先
入寒くくく切りち、世或をこんと
故と云ふ深故と云ふ而も此人
又峯峯を刻する子の古きし
削透坊のえを以て呼ぶや未だ
可し



奥様
原表



以下
10 丁
白紙



